

山がくれた秋



夜明け前の道を抜け
ひんやりとした空気が頬を撫でる
草芝を踏みしめながら
静かな期待が胸を満たす

枝の間に ふと見えた
ひらいた実と まだ閉じた実
鳥たちが先に見つけたことも
なんだか嬉しくなる

紫の実が 朝の光に透けて
「ここにいるよ」と そっと語りかける
見つけた瞬間の鼓動は
誰にも渡せない 私だけのもの

手を伸ばさずに ただ見つめる
それだけで 十分だった
